

況を紹介したい。次に、研究方法論の全体的観点から、台湾近代史の重要な趨勢について説明する。そして近年、学术界が植民地の統治管理や地方社会といった問題を重視し始めたこと、国家と社会の関係を研究することが新しい流れになってきたことも論じる。最後に、現代台湾が「東アジア」をどのように論述すべきかという問題を取り上げ、結びとしたい。

1 日治時期台湾史料の整理と利用——中央研究院台湾史研究所档案館を例に

日治時期の台湾史研究は1990年代から発展し、清朝時代の台湾史に代わり新たに登場した重要分野となった。その原因として、『台湾総督府文書』といった公的アーカイブの公開、『台湾日日新報』などのメディア史料の刊行、各種民間史料の発掘が挙げられるが、それらは研究者に堅実かつ豊富な基礎的史料を提供した²。

植民地台湾の資料収蔵については、戦後から国史館台湾文献館（前台湾省文献委員会）、中央図書館台湾分館（前台湾総督府図書館）、および台湾大学図書館（前台北帝国大学図書館）が三大重要機関とされている³。1980年代後半以後の台湾資料の蒐集や研究は、中央研究院台湾史研究所を例にとると以下のように説明できよう。

中央研究院台湾史研究所は1993年に設立計画段階の古文書室として開設され、各種の台湾史料の蒐集と整理を担っていた。その前身は1988年に成立した中央研究院「台湾史フィールドワーク研究室」で、民間から寄せられた貴重な史料の調査と保存が主な事業だった。2004年7月に台湾史研究所が正式に開設してからは、蒐集対象資料をさらに拡大し、各種の民間文書を購入あるいは寄付といった方法で入手し、合同収蔵やデジタル化の計画を経て、国史館台湾文献館との『台湾総督府公文類纂』デジタルデータベースの共同設置、中央図書館台湾分館との日本語旧籍の整理とデジタル化の作業を行った。これらの業績を基礎に、2009年ついに正式に档案館を開設した。

中央研究院台湾史研究所档案館における日治時期の台湾関係の資料は、アーカイブの他に地図・写真・文献など、出所・タイプともに多岐にわたる。それはおおよそ以下のように分類できる。

- 1、公文書アーカイブ：諭令、公文類纂、土地調査、署名書状といった各種形態の公文書。
- 2、民間文書：土地契約、帳簿、教会資料、履歴書、学校史料といった各種形態の民間史料。
- 3、個人・家族のアーカイブ：書信、辞令（招聘状）、卒業証書、賞状、賞品、風水単、命単、処方箋、招待状、著名人の手書き原稿、訃報、結婚式招待状といったもの。

次に、主な内容について例を挙げながら紹介してみたい。

2 王世慶『台湾史料論文集』（台北：稻郷、2004年）。

3 国立台湾大学図書館：<http://www.lib.ntu.edu.tw/CG/resources/Taiwan/taiwan1.htm>; 中央図書館台湾分館：<http://www.ntl.edu.tw/>; 国史館台湾文献館：<http://www.th.gov.tw/>

1、契約文書：土地文書が最も多く、次が社会文書である。土地文書は中部地区のものが最も多い。台湾史研究所にある重要な古契約文書には、「張振萬家族及び岸裡社文書」「宵裡と大科崁地区の土地文書」「台北地区と金包里社の土地文書」「阿里山社土地契約」および「苗栗西湖劉家の土地文書」などがある。

2、個人と家族のアーカイブ：「台中龍井林家文書」「霧峰林家文書」「桃澗堡銅鑼圈謝家文書」「台南善化蘇家文書」「台中外埔鉄砧山許家文書」「彰化秀水陳益源大厝文書」「豊原張麗俊家族文書」「屏東佳冬蕭家文書」「高雄美濃廖進徳一族文書」「大甲杜香国文書」など。近年、多くの個人や家族からの寄贈により、たとえば詩人で歴史学者の「楊雲萍文書」や、台南善化で代書業を営んでいた「孫江淮文書」、女性音楽家「高慈美文書」の他、「楊延齡文書」「林衡均文書」「詹一邨文書」などが加わった。

3、日記：日記史料は、本所が近年特に力を入れて取り組んでいる台湾史料の一つである。日治時期の台湾政治民族運動リーダー林獻堂の日記、および霧峰林家の林紀堂、陳荅、楊水心、林痴仙（俊堂）の日記。公学校の教師をしていた黄旺成（1888～1979年）の日記49冊（1912～1973年）、弁護士黄継図の日記、医師林玉雕の日記、音楽家高慈美の日記、日本人警察官吉岡喜三郎の日記など、貴重な史料を含む。

4、図表データ：文字資料以外に、本所は地図や写真資料も豊富に所蔵している。古い写真・はがき・アルバム・地図がメインで、年代としては、主に日治時期から戦後初期のものが多い。各地の風景や名勝地・物産・公官庁の建物・原住民の生活をテーマにしたものを含む。なかには、Michael H. Fineganの資料も収蔵されており、図表データとしてネット上で見ることもすでに可能になっている⁴。

5、日本統治時代の旧籍：1999年から、中央図書館台湾分館と協力して「台湾総督府図書館蔵書」「南方資料館蔵書」および前台北帝大教授の蔵書といった文献を整理し、目録を作成した。総冊数は16万冊にのぼる。中央研究院図書館のOPACにアクセスするだけで検索ができ、研究者たちが利用しやすいように貴重な資料を選択してデジタル化した。

6、デジタルデータベース：計画段階より、本所では史籍のオートメーション化作業を進め、『台湾文献叢刊』全文のデータベースを完成させた。また国史館台湾文献館と協同して『台湾総督府公文類纂』デジタルデータベースも立ち上げた。2002年からはデジタル化国家プロジェクトに参加し、国際的な協同作業を通して、国外に分散する台湾関連の資料を蒐集し、各種のデータベースを開設している。またアーカイブ・オンラインおよび「日治時期の台湾研究旧籍データベース」など、台湾史に関するアーカイブを閲覧できる

4 中央研究院『台湾歴史文化地圖系統』第1版（台北：中央研究院、2003年）。<http://thcts.ascc.net/>

サービスを行っている。⁵

2 日治時期の台湾史研究トレンドの紹介——台湾中心史観学を例に

日治時期の植民地台湾研究は、長期にわたる戒厳令時期を通して政治的なタブーとされてきた。国民党政府が抗日民族主義的なイデオロギーを掲げる中、省市の文献会や若干の在野の歴史家らが、中国地方史や辺境史のケーススタディを行っていたにすぎない。1960年代になると、涂照彦・劉進慶・許世楷・黄昭堂・戴天昭といった日本留学経験を持つ台湾人学者が、次々と近代台湾経済や政治外交史の研究を進め、新しい学問の道を切り開いた。戴国輝は1970年代初期に「台湾近現代史研究会」を主宰し、若林正丈や松永正義・春山明哲といった日本人研究者を引き合わせた。そこで日本語や中国語の台湾近現代史史料を蒐集し、霧社事件などの重大なテーマに対しても先駆的な研究を行った。⁶

1990年代以降、前述した各種史料の公開や整理を基礎に、日治時期の台湾史は新しい世代の研究者の成長によって、大きく発展を遂げていった。既存の植民地政治史や経済史・社会史の他に、台湾の法律史や医学史・教育史・都市史・宗教史・文学史などに、新しい風が吹き込まれた。その分析視座もまた、官僚やエリートから女性史・生活史・地域史・原住民族史・人類学史、さらには環境史というように、広がりを見せた。また、文化的アイデンティティ、政治や植民地統治性や台湾民族主義といった理論の重要性も、学界の注目を集め始めた。⁷

以下、具体的な議論を踏まえながら、新しい研究領域の方法論における主要な特色を説明する。

1、台湾中心史観の形成

中国辺境史・日本植民地史・欧米の地域研究の一部に属していた頃の台湾研究と比べ、戒厳令解除以降の台湾史の主な特徴は、台湾中心史観が形成された点にある。研究者は施政者側が提示する抗日民族史観を批判し、土地や人民こそが台湾の歴史の主体であるべきだと主張することで政権や統治者が主体だったそれまでの史観を覆した。そして、台湾史は政治的タブーでも辺境的な学問でもないとして、長期的で全般的な視点から台湾社会の発展と変遷の過程を理解すべきだと主張した。その代表的な主張は、曹永和の「台湾島史」論である。⁸

5 中央研究院台湾史研究所档案館のウェブサイト：<http://ithda.ith.sinica.edu.tw>

6 春山明哲『近代日本と台湾』（東京：藤原書店、2008年）、343～363頁。

7 張隆志「殖民現代性分析與台湾近代史研究——本土史學史與方法論芻議」若林正丈、吳密察主編『跨界的台湾史研究——與東亞史的交錯論文集』（台北：播種者、2004年）、133～160頁。

8 曹永和『台湾早期歴史研究續集』（台北：聯經、2000年）。